



人に優しい風
になりたい

通天閣txp

目次

- 1 人に優しい風になりたい
- 2 さよならクロワッサン
- 3 君と共に
- 4 L I F E
- 5 彼女はパッションレッド
- 6 神様の投げたダーツ
- 7 月と孤独な男

「人に優しい風になりたい」

響いて欲しいな あなたの胸に
心に溢れ出す想い揺れ動くまま
クリスタルブレスのような
澄んだ光を放つ言葉紡げたら
アコースティックピアノの音色にのせて
人に優しい歌を唄いたい
目を閉じてあなたが聴いている時
幼き頃の楽しい思い出が蘇るような
懐かしい気持ちを呼び起こせますように

届いて欲しいな あなたの頬に
晴れ渡る空が広がる静かな午後
柔らかな日差しに包まれて
ゆらゆらと揺れている
タンポポの種を遠くへと運んでいく
人に優しい風になりたい
寒い冬を越えてあなたが居る場所へ
暖かい春の訪れを告げる
微風となりて辿り着けますように

映って欲しいな あなたの瞳に
高い山の頂上から夜空を見上げた時
頭上に広がる無数の星がキラキラと瞬いている
その中の一つを選んで
人に優しい星になりたい
遙か遠くからあなたが見つけた時に
一閃の流れ星となりて
幸せな願い事をかなえることができますように

「さよならクロワッサン」

さよならクロワッサン
牛の鼻輪のように歪な形で
繋がらなかった愛の残夢
微風の中 ひとつ星を探して
夕闇が降りてくる空をじっと眺めた日
河川敷の向こう岸で
トランペットを練習する人の演奏が聴こえていた
時間は小遊星のように太陽を巡る軌道を辿り
心は常緑樹のように緑の葉を宿して
陽射の中で天を摩す

さよならクロワッサン
トースターで少し焦げた後の甘い香り
温かいコーヒーの湯気と共に
百万言の言葉を繰り返すより
掌から伝わる感触が無意の喜びであった日
出会った時はどことなくぎこちなくて
いつしか二人寄り添う内に蕾開いた遅咲きの花
過ぎ去りし日々を呼び戻すことはできないけれど
望む通りにならなかった僅かばかりの心残り
忘我の中で恋焦がれた幸せを抱いて

さよならクロワッサン
碧海碧空が広がるこの場所から
離愁と共に今旅立つよ
流民となりていつの日か遠い空に召された時
雲の上であなたと再会できますように

苦いブラックコーヒーに溶け合わされていく
透明なガムシロップのように
君の温かい眼差しが胸の奥へと染み行く甘美
そこかしこにある空虚な舞台装置など全てぶち壊して
裸足のまま遠いサバンナを駆け抜け
蜃気楼の砂漠を越えた果てに辿り着く
夕暮れのオアシスで再会できたなら
南十字星が見える草原の真ん中で
君が眠りにつくまで僕は魔法の横笛を吹き続けるよ
もし夢の中で歓喜の言葉を綴った紙片を食む羊に出会えたなら
ウールを刈り取って白い帽子を編んでおくれよ

やがて東の空から太陽は昇り
大地に降り注ぐ朝の光が膨らんだ花の蕾を
色鮮やかに開かせたなら
僕らもまた目を醒まして歩き出すよ
穏やかにただ前へ前へと進み行く駱駝の背に乗って
古びた街から街へ
朽ち果てて倒れた老木の幹をくり抜いた木船で
水面に月を照らし出す湖を越えて
時に迷い時に疲れ果て
遠くかすかに見える場所へ足がおぼつかず
なかなか辿り着けないもどかしさも
二人ならきっと手を取り合い歌を唄って歩いていけるよ
そうして昨日から今日へ
今日から明日へ

流れ落ちる涙をそっと拭う白いハンカチのように
ただ傍に居てくれるだけで
君の澄んだ眼差しが心のよどみを取り去っていく時
この世界で生きる事自体に戸惑う僕へ
希望という言葉伝えてくれたかけがえのない奇跡
君と共に今日から明日へ
明日からずっとその先の未来へ
幸せの意味を探し続けていくよ

プランクトンが漂う深い海の底から
隕石が流れていく宇宙の彼方までも飛び越えて

孤独を象徴した灰色のジャケット
無造作に右ポケットを探れば
中から出てきた白いハンカチ
脱ぎ捨てた黒いハットに被せれば
魂は空へと解き放たれる
風は砂埃を巻き上げ街を吹き荒れ
雲はちぎれちぎれに流れて空の彼方へ消えていく
今日も止まることなく刻まれる時間

陽だまりの中で僕たちは木にもたれかけ軽く目を閉じる
あるがままの世界でやるせなさを塗りつぶす色鉛筆が折れても
強く心に思い描く未来への色は生命の血が滾るスカーレット

歪んだ映像しか映らない古いTVを消してバイクに跨り走り出す
渋滞する道路を過ぎ去りアクセルをふかして加速すれば
見慣れた景色は一気に遠ざかる
風は気まぐれに凧いでまた吹き始め
雲は時に雨となり地に落ちてまた空へ昇る
今日も沢山の出来事の中過ぎ行く時間

星が瞬く夜の中で僕たちは砂浜にバイク止めて波の音に耳を傾ける
あるがままの世界で明日の訪れを告げる時計のアラームが聞こえなくても
海を渡る鳥の鳴き声に目覚めた朝は
空が鮮やかに晴れ渡ったスカイブルー

「彼女はパッションレッド」

UVカットのサングラスと赤白ボーダーのマリンキャップ
喉の渇きにはビタミンレモンウォーター
夏の匂いが大好きだけど暑いのは嫌いで
すいかをよく食べるけど種を出すのは面倒だ
ビニール袋の中でじっとしている金魚が
自由に泳げる場所へ解き放たれるように
もやもやした感情はじけとぶ瞬間は
どこで見つけられるのって四角い地図覗き込むよ
街外れに佇む小さな時計台まで
君が迎えに来てくれたなら
ETCの付いた黒いミニバンであの海へ行こう
黄色いパイナップル模様のビーチサンダル踏み鳴らし
碧い空と澄んだ水面の真っ只中で
二人イルカのように泳ぎだしたら
太陽のリフレクション体に浴びて
躍り出す気持ちパッションレッド
時間を忘れて 過ごしていたいな

夕焼けに照らされて
砂の城は波にさらわれた
ひりひりする肌に薬用のクールローション
船を観るのは好きだけど乗るのは苦手で
アイスクリームをよく食べるけど太るのが面倒だ
夜空へ高く打ち上げられた花火が
星よりも鮮やかに光り輝いて瞬くように
心に点火して宙へ飛び立つ瞬間はいつ訪れるのって
胸に手を当てて探してみるよ
街外れに佇む小さな時計台まで
君が迎えに来てくれたなら
ETCの付いた黒いミニバンであの海へ行こう
黄色いパイナップル模様のビーチサンダル踏み鳴らし
碧い空と澄んだ水面の真っ只中で
二人イルカのように泳ぎだしたら
太陽のリフレクション体に浴びて
躍り出す気持ちパッションレッド

時間を忘れて過ごしていたいな

「神様の投げたダーツ」

切れそうなアルコールランプ片手に
薄暗いジグザグの迷路を進んでいる
右へ行こうか 左へ行こうか
まだ歩き続けようか 少し引き返そうか
迷ってる内に怖くなって
心細くなって脚が震えてる

蕾をつける前に萎れて倒れてしまいそうな
弱々しい新芽を見つめている
水をあげようか 大きな鉢植えに植え替えようか
外でお日様に当てようか 風のない部屋に置こうか
考えてる内に自分がそいつの命を握らされてるようで
どうにかならないかと思いにふける

人生はそんなことの繰り返しで
夜空をふと見上げ流れ行く星に
誰もが願いをかけても
幾人の人がかとうんだろうか

まだ限界じゃないから 歩いていけるとか
信じ続ければ 花はいつか咲くでしょうとか
儚い現実の向こうに埋もれた劇的な未来という
不確かな宝を探す毎日

神様の投げたダーツは次何番に突き刺さるのだろう？
運命の悪戯とやらはどうすれば起こるのだろう？
祈りを捧げてる内にただ待つよりこの世界で
もっと他にやることあるだろうって
自分の影が囁いて来る

幸運の慈雨はどうすれば降り注ぐのだろう？
本当の自分とやらはどこへ行けば見つかるのだろう？
あれこれ調べてる内に結局この世界で起こす行動こそが
明日の自分を導くことに気づいている
いつか迷路の出口に辿り着くまで 花が咲くその日まで
笑いながら過ごして行こうぜって 心の奥で鼓舞する声が

壊れかけの自分に言い聞かしてるような気がした
神様のダーツは当たらなくても 廻り続ける
ルーレットの中に いつも一つ自分の番号があることが
この世に存在する意味であるように

虚ろな街明かりに誘われて
寂れた通りを歩き続けている
スミノフ片手に鼻唄歌っても
何もないまま夜はふけて
自分の心細さ思い知らされるのさ
Ah 白いシャツの胸元へ
冷たい秋風が吹き込んで
静寂の中 丸い月が淡く輝いているのさ
Ah いつかこの広い世界で
あなたと瞳触れ合った瞬間に
煌くエメラルド胸に閉じ込めるのさ

ありふれた言葉の向こうに
暖かい気持ちが込められている
泡沫のように過ぎてく日々も
あなたと繋がる瞬間
心から笑顔浮かべるのさ
Ah 金のガチョウが囁いてる
割れないまま僕らが抱いている金の卵
温め続けたらきっと生まれる
Ah いつもこの広い世界で
目覚め行く朝には
輝く太陽が頭上を照らしているのさ
Ah ただこの明け暮れる世界で
あなたの声が届く度に
僕は少し幸せになれるのさ

人に優しい風になりたい

<http://p.booklog.jp/book/61357>

著者：通天閣txp

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tuutenkakutxp/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61357>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61357>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ